

た。埋却地 A 及び B でメタンが地中から出てきている箇所があることが確認された。

＜考察＞平成 23 年度各埋却地の臭気指数は敷地境界の臭気指数とほぼ変わらないレベルとなった。未だ埋却家畜の分解が進んでいない（完了していない）ことも考えられメタンの噴出は続くと思われるが、調査結果からこれまで以上に臭気指数が上昇する事は考えにくい。今後とも埋却地でのモニタリング調査（悪臭）は必要と思われる。

（この事業は平成 22・23 年度環境省嗅覚測定法検討調査委託業務で実施した）

○廃棄物再生利用における環境影響評価について（廃棄物処理施設等における再生利用促進事業）

・中村公生¹⁾、森下敏朗¹⁾、立山諒¹⁾、関戸知雄²⁾

¹⁾宮崎県衛生環境研究所、²⁾宮崎大学工学部

「平成 23 年度全国環境研協議会廃棄物資源循環学会年会併設研究発表会

（平成 23 年 11 月 4 日 東京都）」

廃棄物処理施設等から発生する溶融スラグ等を建設資材等として有効活用することにより、その最終処分量の大幅な減少を図るため、本県産学官連携により実施された「廃棄物処理施設等における再生利用促進事業」において、宮崎大学工学部等と共同で溶融スラグ等の環境影響評価試験を行い、環境への安全性を評価した。

県内の廃棄物処理施設で発生した溶融スラグ、この溶融スラグを骨材として利用したアスファルト、及び溶融スラグを細骨材として利用したコンクリートを試験試料として用い、JIS K 0058-1 に準拠した溶出量試験、同 K 0058-2 に準拠した含有量試験を行った。また、アベイラビリティ（長期環境影響評価）試験を実施した。これらの試験結果及び今後の課題等は以下のとおりである。

①溶融スラグ自体及び溶融スラグを混合したアスファルト舗装材やコンクリート製品試作品についての各種溶出試験結果は、アベイラビリティ試験を含め良好であることから、重金属等による環境への影響は極めて小さいことが認められた。

②溶融スラグについては、鉛等の含有量と溶出量のロット間変動があるので、ある程度の量をストックして濃度を平均化する必要がある。また、溶融スラグ製造工程との関連についても今後調査

を継続する必要がある。

③今後、溶融スラグ利用の試験舗装や試作・試験施工等をさらに進め、性能・環境影響評価を実施するとともに、ガイドラインの策定等により溶融スラグ活用システムを構築する必要がある。なお、溶融スラグを利用したアスファルト舗装試験施工区間の物性面及び溶融スラグ混合コンクリート製品試作品の物性面についても良好な試験結果であることを、別途、廃棄物処理施設等における再生利用促進事業の物性試験グループにより確認済みである。

○九州・沖縄・山口地方酸性雨共同調査研究（第Ⅲ期）について

・中村雅和¹⁾、岩切淳¹⁾、祝園秀樹²⁾、溝口進一³⁾、森下敏朗¹⁾、友寄喜貴⁴⁾、濱村研吾⁵⁾

¹⁾宮崎県衛生環境研究所、²⁾現 宮崎県食品開発センター、³⁾現 宮崎県環境管理課、⁴⁾元 沖縄県衛生環境研究所、⁵⁾福岡県保健環境研究所

「第 37 回九州衛生環境技術協議会

（平成 23 年 10 月 6 日 熊本市）」

九州・沖縄・山口地方酸性雨共同調査研究の解析結果（第Ⅲ期）について報告した。平成 14～21 年度のデータを解析した結果、 $nss\text{-SO}_4^{2-}$ の湿性沈着量および乾性沈着濃度の経年変化が中国における SO_2 排出量の経年変化と類似した挙動を示していることから、本地方では大陸からの移流による越境汚染の影響が大きいと考えられた。中国における SO_2 排出量は漸減傾向にあるが、アジアでの SO_2 排出量は増加していきとえられるため、今後も越境汚染の影響に注目しながらモニタリングを継続する必要がある。

○口蹄疫に係る埋却地周辺の水質調査について

・赤崎いずみ¹⁾、河野通宏¹⁾、立山諒¹⁾、岩佐美紀子²⁾、杉本恵³⁾、岩切淳¹⁾、中村公生¹⁾、森下敏朗¹⁾、堀田剛⁴⁾、深江弘恵⁵⁾、山田亨¹⁾、岩切章¹⁾、大浦裕子¹⁾

¹⁾宮崎県衛生環境研究所、²⁾宮崎県中央保健所、³⁾宮崎県都城保健所、⁴⁾宮崎県高鍋保健所、⁵⁾県立宮崎病院

「第37回九州衛生環境技術協議会

（平成23年10月6日 熊本市）」

平成22年4月に宮崎県で発生した口蹄疫では、